

馬が、つなぐ

原茉莉



●受賞のことは
この度は、歴史ある賞の佳作をいただき光栄です。ありがとうございます。
「優駿エッセイ賞」の募集を知ったのは、初夏の頃。その少し前、日高で馬たちを眺めていた時に浮かんだイメージを頼りに、パソコンに向かいました。断片的だった記憶は、書き進むにつれ像を結んでいき、エッセイとしてよみがえりました。文章を通じて競馬ファンの皆様と少しでも分かち合えるものがあれば嬉しいです。

●プロフィール
1982年、秋田県生まれ。埼玉県育ち。上智大学文学部卒業。現在、PR会社勤務。東京都在住。趣味は、競馬の他、読書、料理、旅行、星占いなど。無類の白い動物好き(とくに馬とフレンチ・ブルドッグ)。

群れて駆ける若駒達の向こうでは、まだ産毛の抜けきらない仔馬が母馬に寄りそうようにして歩いている。ぬるい風が頬を撫で、湿り気を含んだ牧草が香り立ち、雨を知らせる蛙の大合唱が始める。東京の気味い梅雨を逃れるようにして飛んだ北海道日高町の空もまた雨曇りだった。競走馬の生産地として有名なこの町を繰り返し訪れるようになって数年が経つ。

競馬ファンになつたきっかけを覚えているだろうか？友人に誘われて初めて行ったレースで大当たりが出たとか、スターホースの活躍を見て馬が好きになったとか、あるいは、家の近所に競馬場があったから、という人もいるかもしれない。人それぞれだろうけれど、「父親が競馬好きだった」というのも割と多い契機ではないかと思う。

私の場合もそうだった。記憶は三十年以上前にさか

のぼる。初めての競馬体験は、物心ついたばかりの頃、父に連れられていった高崎競馬場だった。八十年代後半のことで、埼玉北部の町で生まれ育った私にとって、競馬場といえば、長らくこの高崎競馬のことだった。父は、典型的なインドア派で、休みの日には、ソファに寝そべって本を読むか、競馬の中継を眺めていることが多かった。出掛けることはあまりなく、キャンプ場に連れて行ってもらった記憶はないけれど、競馬場だけは例外だった。

日曜の昼前になると、母には「ちよつと出かけてくる」とだけ言って、助手席に私を乗せた青いブルーバードのハンドルを握った。三、四十分も車を走らせると高崎競馬場が見えてくる。父は、面白がつて子どもに小銭を持たせて、馬券売り場の窓口にかせるような人だった。当然購入することはできなかったが、窓口の係の人はやさしく「お父さんはどこかな」と諭し

キヤップの姿だ。当時、大流行したクレインゲームのぬいぐるみに、人気の競走馬たちを模したものがあつたのだ。

オグリキヤップの輝かしい戦績も知らないまま、栗毛や黒鹿毛の馬たちに混じってちょこんと座っているグレーの馬をどうしても手に入れたくて、ゲームセンターの前を通る度に、父に小銭をねだった。母は渋い顔をしながら、父は小銭を入れた。ポケットをじやらじやら鳴らして百円玉、ときには五百円玉を渡してくれた。一回のプレイは百円だが、五百円だとおまけで六回プレイできたのだ。ゲームと賭けごとが好きで気前のいい人だった。クレインゲームの前で粘りに粘って手に入れた緑のメンコと有馬記念のタスキを着けたオグリキヤップは、幼い私の宝物になった。

中学校に上がると、勉強に部活に交友にと、世界が急に広がった。一方、父もその頃新しく始めた事業が軌道に乗り忙しくなった。自然と二人で出掛けることは少なくなり、競馬場も遠のいていった。そんな中でも競馬への興味が尽きたわけではなく、少年漫画誌で連載していた競馬漫画は、毎週欠かさず読んでいた。主人公の小さな白い馬と個性豊かなライバル馬たちのやりとりや、本格的な競馬知識が盛り込まれたストーリーに夢中になった。そういえば、競馬漫画に登場する馬は、芦毛が多い。オグリキヤップの功績なのか、日本人は白い馬が好きなのか、どちらなのだろうか。そんなことを考えるのもまた楽しい。

ひさしぶりに、競馬場を訪れたのは、友人に誘われて足を運んだ二〇〇五年の東京優駿だった。ディーブインパクトが、二冠を制し、その圧倒的な強さを世間

に知らしめた歴史的レースだ。

中団後方につけていたディーブインパクトは、最後の直線で大外から躍り出ると厩巻の末脚でぐんぐんスピードを増し、結果、二着に五馬身もの差をつけてゴールした。鞍上は、武豊騎手。レース後、「感動しています。この馬の強さに」とコメントし競馬ファンを沸かせた。

この年、私は、大学を卒業し、社会人としてスタートを切ったばかりだった。仕事に慣れるのに毎日が一杯で、将来への希望も不安も大きかった時期だ。そんな時に観たレースだった。

毎年、約七千頭の競走馬が生まれる。セールでふるいにかければ、新馬戦を勝ち抜き、勝敗がすべての世界でしごを削る。その中から頭角を現し、重賞に出るだけでも大変な確率なのに、一生に一度の大舞台でプレッシャーを物ともせず、堂々たる優勝を収める。それがどれ程困難なことかと考えると、途方もない気持ちになる。しかし、その苦勞を微塵も感じさせず、観衆の期待を決して裏切ることのない煌めく鹿毛の馬。それがディーブインパクトだった。

いつの時代も、観客はスターホースの勇姿に未来を重ね、自らを鼓舞し、手に汗握るのではないだろうか。競馬はただのギャンブルではない。馬群を引き離していくディーブインパクトが、ゴールを切ったその瞬間、鳥肌が立つ程に心を打たれた。父が競馬を愛していた理由がわかった気がした。

それから、また時々、競馬を見るようになった。三十歳を過ぎてからは、これまた芦毛のゴールドシップに夢中になった。GI六勝の実力に加え、父ステイゴ

てくれた。子ども扱いされたのが恥ずかしくて、顔を赤くして振り返ると父は愉快そうに笑っていた。いまでも人々との距離が近い時代だった。丸めた新聞を持ったたくさん大人の大人がいて、焼きそばを売る露店があつて、ファンファーレが空高くこだまする場内は、子どもにとっては、お祭りのような晴れの場所だった。私の競馬場デビューから程なくして、競馬界を賑わせたのが、「芦毛の怪物」オグリキヤップだった。八七年から九十年を現役馬として過ごしたオグリキヤップは、生まれながら持った足のハンディキヤップを乗り越え、地方競馬から中央競馬の主役へと大躍進した。その実力とサクセスストーリーで人気を博し、第二次競馬ブームを巻き起こしていた。

といつても、当時、私は小学校に上がったばかりだ。残念ながらレースの記憶はほとんどない。代わりに思い浮かぶのは、可愛らしいぬいぐるみになったオグリキヤップの姿だ。当時、大流行したクレインゲームのぬいぐるみに、人気の競走馬たちを模したものがあつたのだ。オグリキヤップの輝かしい戦績も知らないまま、栗毛や黒鹿毛の馬たちに混じってちょこんと座っているグレーの馬をどうしても手に入れたくて、ゲームセンターの前を通る度に、父に小銭をねだった。母は渋い顔をしながら、父は小銭を入れた。ポケットをじやらじやら鳴らして百円玉、ときには五百円玉を渡してくれた。一回のプレイは百円だが、五百円だとおまけで六回プレイできたのだ。ゲームと賭けごとが好きで気前のいい人だった。クレインゲームの前で粘りに粘って手に入れた緑のメンコと有馬記念のタスキを着けたオグリキヤップは、幼い私の宝物になった。

感動的なレースを観る度に、もつと父と競馬の話をしてあげばよかったという思いが募る。しかし、その思いが、私を競馬場へ連れていくのかもしれない。客席からレースコースを眺める時、日高の牧場で放牧された馬たちの嘶きを聞く時、父が体験した競馬の記憶を辿っているような気持ちになることがある。馬たちを媒介して、父と何かを共有しているような気がするのだ。

ふと顔を上げると、群れの中にいた一頭が立ちどまり、首を伸ばすようにして、こちらを見ている。昨年の春生まれた芦毛の牝馬だった。まだ細い体躯ながら、気の強そうな表情をしている。いつの間にか蛙の声は止み、遠くの雲間に青い空がのぞいていた。

この七月に、ゴールドシップ初年度産駒のセレクトセール上場予定が発表されたことを思い出す。父も芦毛の馬が好きだった。いまはまだ無邪気に駆け回る若駒たちは、これからどんなドラマを見せてくれるのだろうか。来年も、きっと日高を訪れようと心に決めた。

